

日野町公民館体制のあゆみ

講師 鎌掛公民館
館長 瀬川 欣一



必佐公民館が昨年、平成7年度の全国公民館大会での最高栄誉である、文部大臣表彰に輝くという快挙を果たしていただきました。その表彰内容は、建設への意欲はもちろんのこと年間の運営やあらゆる公民館活動の全てが、住民の手によって進められる、つまり、住民主導型の公民館活動であるということが、高く高く評価されたからでした。

住民主導型の公民館とは、地区内の各字々から選ばれた完全なボランティアである実行委員の面々が、公民館活動一切の企画をし、それを確実に自らの手で運営し、それでいて何一つとしての報酬や見返りを期待することのないままに、任期中に身に付けた公民館活動を通じて得た社会活動のノウハウを、次の実行委員へそのまま引き継いでいくという、全国的な視野からすれば、非常に稀な地域公民館システムを貫いている公民館活動。これが住民主導型公民館です。

私達日野町に住む者から見れば、「そんなことは当たり前、それが公民館の姿じゃないか」と、別に不思議にも感じませんが、どうしてどうして、このような住民主導型の公民館は非常に稀な存在です。機会がありましたら日野町以外の全国各地の公民館で、その組織や運営内容や活動の進め方などを聞いてみて下さい。私達がいま行っているやり方とは大いに違っていることに気付いていただけるはずですよ。

そして更には、日野町内7つの館で、私達が情熱を燃やして取り組んでいる今のこの公民館活動こそが、そこに住む者のための真の公民館活動であるということにもお気づき頂き、自らの活動に大きな誇りを持って頂けるものと思います。

日野町の公民館は7館共に、こうした形での活動が積み重ねられてきたのですが、いま此処にお集まり頂いている実行委員さんのお一人お一人が、「公民館とはこういうもの」と認識してもらっているそのイメージは、恐らく最低でも7通りのイメージがありましょう。同じ日野町内でありながら、日野町の場合は7館すべてが独立館ですので、1館1館のカラーがあります。従って実行委員の皆さんにしても住民すべての方々にしても、胸に描く公民館像が地区地区によって少しづつ違うのです。

多くの他市町の公民館は、その中央に中央公民館があり、地区公民館は中央館の傘下に組織され運営されておりますが、日野町の場合は行政組織図的にはそのようになっていますが、運営や活動は、地区ごとの独自性を存分に発揮できる公民館となっております。だからこそこの公民館においても、歴史的な地区の伝統とその基盤の上に立って、やる気満々の実行委員集団の手によって、素晴らしい住民活動的な公民館事業を展開させることができます。先ず私達は、このことを公民館関係者として誇り合いたいものです。

とは言うものの、この日野町の公民館活動システムが最高の理想的な組織とは決して申せません。実は、このような形にならざるを得なかったという過去における大変苦しみ抜いた経過があったならこそ、いわば、苦肉の一策として現在のこの組織が出来上がってしまったという歴史があります。

そんな経過を知って下さい。

もう30数年も前の昭和30年代から40年代の頃、今では全く考えられませんでした、その頃の公民館は、町の行政体の中からは、まるで厄介者か異端者であるような扱われ方を受けておりました。行政推進の上では、あっても無くてもどちらでもよいという添え物的な施設だと考えられていたのです。

現在の日野町は、昭和30年(1955)に、1町6か村が合併して誕生致しました。その町村合併の当座は、旧村での「これが公民館だ」と位置づけられる建物も組織も殆どありませんでしたので、6つの旧村役場がそのままに、役場の本庁に対する支所となり、新町行政の末端事務がそれらの支所で行われておりました。約1年のあと、その支所が縮小されて名称も連絡所となり、その連絡所もまた2、3年後に廃止をし、行政事務の一切を本庁で行う方針が打ち出されました。

ところがその連絡所廃止に対して、各地区ともから猛然とした反対意見が湧き起こりましたので、それを受けた町当局では、「それならば連絡所である旧役場を、そのまま地区

の公民館とし、その公民館での日常事務をする主事は、1か月の内半分ぐらいは勤められるという、そんな人を地区で探して貰ってその人を主事に任命してくれ」という反対意見を封じ込めるための急場のがれとも言える方針を立て、それを強行しましたのが、日野町における公民館活動の発足だったのです。

あの頃は全国的な市町村合併のブームでした。そのブームの中で新しく発足した多くの市町村では、教育と言えば学校教育オンリーの時代であっても、国や県が強く指導していた社会教育の重要性をいち早く受け止め、新市町村の誕生と同時に、公民館体制を打ち立てていった市町村が多かったのですが、残念ながら日野町は、当座しのぎの政策として実にアヤフヤなままの7つの公民館が出来ていきました。

語弊がありましょうが、早く言えば、町行政からは見離された公民館であったと言うことができます。これが、あの当時の日野町の公民館の実態であったことを覚えて下さい。

だが、こんなにアヤフヤなまま出発しました公民館でも、日が経つにつれて住民の要求は多くなり、旧村の役場だったものですから依然として地区ごとの拠点となって、非常勤の勤務でいいとなっている主事その人の肩に次々と仕事がかかってくる、そうこうするうちに強い住民の要望と運動によって、新しい公民館が建っていきますと身分が非常に不安定なままの主事の肩へ、公民館業務をこなしていく過重なまでの責務が課せられていくようになりました。

今年の公民館大会は第5回目の大会です。その第2回目、昭和43年(1968)に開かれた公民館大会の大会テーマを見て下さい。そこには、「これでよいのか日野の公民館」とあります。これでよいのか！……。この悲痛なまでもの叫びにも聞こえるこのテーマの一語は、他市町の公民館組織との比較において、余りにも不備であり過ぎる日野町の公民館をなんとかかしたいという、関係者の切実な願いを表しております。

こうした不備体制とあらゆる面での組織上のアヤフヤさを、「このままでは駄目だ。住民の我々が支えていこう」と、それぞれの公民館で燃え上がって下さったのが、実行委員の皆さんでした。「あの館ではこんなことをやっているぞ。我々の館でもやろう」、「こんなことを考えた。どうだろうか。やろうじゃないか」。こうした年々の尊い積み重ねが日野町における公民館活動は住民主導が当たり前、という姿にいつしかなっていました。

あれから30余年。今もなお不十分なままにも、あの頃と比べたら格段の差があるとも思える教育委員会傘下での組織も整いました。「公民館は各地区へ全面委託をし、一定の補助金で全部を賄って貰え。町にとっての公民館は、お荷物以外の何ものもない」とあの頃には、罷り通っていた行政中核にいた者の暴言も再び聞くことはないでしょう。

そして今、以上のような苦難の歴史があった上で、「日野町の公民館体制を学ぼう」という声が、各地から聞かれるようになったことは、本当に嬉しいことではありませんか。この喜びを私達は誇りにし合うと共に、ここまで築き上げて下さった何百何千人という実行委員の先輩達に、深く感謝しなければならないと思います。

地域公民館が果たさなければならない究極の目的は、その公民館が存在する地域の住民自治活動の振興にあります。

そのためには、公民館の建物そのものが、すべて、住民の方々の共同の茶の間であり、台所であり、お座敷でなくてはなりません。住民共同の場であるならば、そこへ出入りするのには、自由であり、気軽であり、楽しいものでなければならないことは申すまでもありません。ともすれば教育の聖域と考えられる公民館の場を、自由で気軽で楽しい場にしていくには、地域ボランティアの実行委員さん達が率先垂範して、足しげく公民館へ通っていただいて、楽しい場を設けていただければ、住民の皆さんも必ずそれに続いて下さるに違いない、それが理想とする住民主導の公民館振興となっていきましょう。

過去における日野町での7つの公民館誕生が、少々常軌から外れていた出発点であったならこそ、多くの先輩各位の英知の集結によって、現在にまで高められたこの尊い軌跡を私達は決して忘れることなく、過ぎ来し過去を深く学び、目前に迫っている新世紀での日野町でのより良き公民館活動へ向けて、今のこのボランティアによる実行委員会の制度を誇りを持って確実に未来へ引き継いでいって頂く努力を、ぜひぜひ重ねて下さることを切に願ってやみません。